

悪と忘却の穴の問題 ——『エルサレムのアイヒマン』再考——

三 浦 隆 宏*

The Problem of Evil and Holes of Oblivion:
Rethinking *Eichmann in Jerusalem*

Takahiro MIURA

『エルサレムのアイヒマン』は奇妙な書物である。

まず、この本は副題を「悪の凡庸さについての報告」としているにもかかわらず、当の「悪の凡庸さ」という語は、最終章の最後の一文においてしか現われない。また、『エルサレムのアイヒマン』と題してはいるものの、法廷での被告人についての描写に終始しているわけではなく、特に中盤からの数章は、ドイツ周辺諸国のユダヤ人移送政策にかんする叙述が主軸をなしている¹。さらには裁判の報告という体裁を採ってはいるものの、著者のハンナ・アーレントが公判を傍聴した回数のごくわずかである。

もっとも、同書が奇妙なのは、アイヒマン裁判および被告人をはじめ、この裁判に関わった幾人かの人々がそうだったからにほかならず、アーレントは同書において頻繁に「奇妙 strange, curious」(EJ:7,9,37,41,43,49,65,90,126,141,197,208/6,10,51,56,59,69,91,126,177,197,273,288)²という語を用いている。そして、それは後年に発表された「思考と道徳の問題」においても同様である。「アイヒマンは愚鈍なのではなく、奇妙なほどにまったく思考することができないのでした」³。

『エルサレムのアイヒマン』は、その奇妙な裁判ならびに被告人らをなんとか理解⁴しようと試みたアーレントの苦闘の報告でもあるのだ。「ホロコーストが、世界的に広く知られるようになったのは、1978年にテレビドラマ『ホロコースト——戦争と家族』が、アメリカNBCで放映されてからである」⁵とのことだが、その15年も前に彼女は、アイヒマン裁判を通じて、ホロコーストという未曾有の災厄がいかにして起こったのか、その「全体像 “general picture”」(EJ:141,181/197,251)を読者に伝えようと懸命に努めている⁶。

同書は刊行からまもなく60年を迎える。この間、新たに明らかとなった事実も数多い。本稿は、それらも踏まえて、あらためて『エルサレムのアイヒマン』を再読=再考することを目的とする。それは同書を起点にアーレントの後半生の思想の軌跡を辿りなおしてゆく最初の試みでもある。

*心理学科 准教授

1 発表までの経緯

アーレントは、友人のメアリー・マッカーシーに宛てた（アイヒマン逮捕の一報からおおよそ1か月後の）1960年6月20日の手紙のなかでこう書いている。「私は今どこの雑誌がアイヒマン裁判の取材に私を派遣してくれないものかと、半ば本気で考えています。とても気をそそられます。彼はあの連中のなかでは最も聡明な intelligent 人物の一人でした。おもしろいものになりそうです——恐ろしいことなのは別として」⁷。じっさい彼女はその後、雑誌『ニュー Yorker』に手紙を出し、派遣の同意を取り付けたことを友人に伝えている⁸。

ベッティーナ・シュタングネトは、2011年刊行の『エルサレム〈以前〉のアイヒマン』において、アーレントが「アイヒマンという名を知るにいたった」時期を、遅くとも1943年の8月27日から数日のあいだだと推測している。というのもアーレントは、自身が1941年10月から定期的に記事を寄稿してきたユダヤ系のドイツ語新聞『アウフバウ』の8月27日付の一面の記事「模範的ゲッター」テレージエンシュタット」に対して、異議を唱える投書を9月3日に書いているのだが⁹、その記事に「ヘブライ語とイディッシュ語を話すゲシュタポ警部」としてアイヒマンの名が記されていたからだ¹⁰。

本稿では軽く触れるに留めざるをえないが、シュタングネトは先の本の前半において、アイヒマンが行方をくらませてから、様々な人々のあいだで数々の噂（たとえばサローナ物語）や（罪を彼になすりつけるための）嘘が広まり、彼が「カリギュラ」「大審問官」¹¹「決定的に重要な証人」¹²「確信的な反ユダヤ主義者」¹³「ユダヤ人の敵ナンバー・ワン」¹⁴という悪名を獲得してゆく化身のメカニズム¹⁵を明らかにしている。これらの悪名のいくつかは、新聞等を通じてアーレントの耳にも届いていたに違いない。

アイヒマン裁判の報告の執筆は、「1962年の夏から秋にわたり、同年11月」に完了したという（EJ:xxiv/ii）。ヤング＝ブルーエルは、「彼女はそもそも『ニュー Yorker』に単発記事を書くつもりだったのだが、山ほどの文書を入手した後で、手元にある新聞記事はあまりよくないと判断し、もっと長いものを書くことが必要だと確信した」¹⁶と記しているが、マッカーシーへの手紙において、「みんなが驚いたことに」とアーレントが記すように、長くなった原稿は、『ニュー Yorker』編集部の判断で「ほとんどそっくりそのまま」¹⁷全5回の連載記事となって、翌年の2月と3月に掲載され、5月には単行本として刊行される運びとなる。

2 梗概

現行の『エルサレムのアイヒマン』は、本文にあたる全15章とエピソード、そして1965年の改訂増補版に付された巻頭の「読者に」と巻末の「追記 *postscript*」¹⁸とから成る。追記の検討は本稿の手には余るため、別の機会に譲ることにする¹⁹。

以下、雑誌掲載時の区分に従い、全体を5つに分けて、その概要を確かめておこう²⁰。

1：第1章から第3章までであり、法廷をイスラエルの首相ベン＝グリオンを「見えざる舞台監督」（EJ:5/3）とする「見せ物裁判」（EJ:4,9/3,9）として批判的に描写しつつ、「ユダヤ人評議会の行なった対ナチ協力」（EJ:11/12）について触れ、「本の最初の10ページが過ぎないうちに、〔中略〕非難の対象となるかなりの材料を提供する」²¹第1章につづき、第2章と第3章とでは、被告人アドルフ・アイヒマンについて、その特徴が記される。「ほらを吹くこと bragging はどう見ても一貫して彼の最大の悪徳の一つだったようだ」（EJ:29/40）や「紋切り

型の文句 clichés で自慰するというこの恐ろしい長所は、死の寸前にあっても彼から去らなかつたのである」(EJ:55/77) といった文言が象徴的に示すように、嘘をつき、昂揚しては、「驚くほど一貫して一言一語たがわず同じ決まり文句 stock phrases や自作の紋切り型の文句をくり返したという事実」(EJ:49/68) が強調されている。また、彼が決して狂人ではなく、「平均的で〈正常〉な人物」でありながらも「善悪を弁別する能力をまったく欠いている」のはなぜかという、「この裁判全体の提起する最大の道徳的、そのみか法的な問題」(EJ:26/36f.) について記されている点も注目できる。アイヒマン裁判以後、1975年のその死まで、彼女はこの問題を問いつづけることになるからだ。

2：ついで第4章から第6章では、ナチスが行なったユダヤ人問題の解決が、アイヒマンの供述——もっともそれは「穴だらけの記憶」(EJ:80/112) にもとづく——と絡めながら、追放、強制収容、殺戮の順に描き出される。とはいえ記された内容は章のタイトルに即しているとも言えず、たとえば第6章では、反ヒトラー陰謀についてやや詳しく立ち入っている²²。そしてその過程でアーレントが紙幅を割いて論じるのが、アイヒマンやドイツ国民らの「良心の問題」(EJ:97/136) である。「ナチ体制が始まったばかりの頃から何らの動揺もなくヒトラーに反対してきた人々がドイツにいた」という事実、しかも「彼らはいたるところに、あらゆる社会階層の中に見出された、庶民の中にも教養階層の中にも、すべての政党の中に、おそらくNSDAP(ナチ)の党員のあいだにすらも」(EJ:103/145f.) ——では、なぜ彼らは「正邪を識別する能力」が損なわれず、「まったく〈良心の危機〉に襲われなかった」(EJ:104/146) のか？ この問いは、後年の「道徳哲学の諸問題」や「思考と道徳の問題」においてあらためて検討されることになる。

3：第7章と第8章から成り、前者では「自分の民族の滅亡に手を貸したユダヤ人指導者たち」(EJ:117/164) の役割が、レオ・ベックらの名やユダヤ人の犠牲者数をも交えつつ具体的に記される。アーレント曰く、「エルサレム裁判によってはその真の重大性を世界の前に明らかにされなかったこの問題をここで縷説した」のは、「この問題こそナチが尊敬すべきヨーロッパ社会に——それも単にドイツだけではなくほとんどすべての国の、しかも単に迫害者の側だけでなく被害者のあいだにも——引き起こした道徳的崩壊についての、最も衝撃的な認識を与えるから」(EJ:125f./175f.) にほかならない。つづいて第8章では、アイヒマンが「カントの定言命法のおおよそ正しい定義を下してみせ」ながらも、それを「読み曲げていた」(EJ:136/190f.) ことで、盲目的に服従する徒となったという彼女の理解が記されたあと、「戦争の最後の年に」(EJ:137/192) 彼がSS内で置かれていた状況やその心中が詳しく描かれる。第7章と第8章は(章タイトルが内容に即しているかどうかはともかくとして) 対をなす間柄にあると言ってよい。

4：連載において最長の第9章から第13章までが充てられており、アーレントがユダヤ人にとっての「世界の終わり」(EJ:153f./214ff.) と形容する、ヨーロッパ各国(すなわちドイツ、オーストリア、西ヨーロッパ、バルカン諸国、中欧)からのユダヤ人追放をめぐる具体的な経緯が、国ごとに記されてゆく。結果、彼女は以下のような結論に達する。「最終的解決における彼〔アイヒマン〕の役割は(このことは今や明らかになったが) 猛烈に誇張されていた——ある点までは彼自身のほらのおかげで、ある点まではニュルンベルク裁判やその他の戦後の裁判の被告たちが彼を犠牲にして自分の無罪を証明しようとしたために、しかし何よりも彼がほかならぬ〈ユダヤ人業務を専門とする〉唯一のドイツ人係官だった以上、ユダヤ人役員と緊密に接触していたために」(EJ:210/290f., [] 内は引用者による補足。以下、同)。

5：第14章と第15章、およびエピローグから成り、場面があらためてエルサレム法廷へと

戻される。第14章では「各国別に恐るべき証言を行なった100人の検察側証人」(EJ:223/307)のうち何人かの証言が引かれ、「物語を語ること」の難しさが指摘される(EJ:229/317)いっぽうで、ジンデル・グリュンシュパンの証言やドイツ軍のアントン・シュミット曹長のユダヤ人救出の逸話が印象深く記されている。つづく第15章では、焦点が再びアイヒマンに当てられ、戦争終結までの最後の数か月に始まり、アルゼンチンでの逃亡生活の様子、1960年の拉致後からエルサレムでの日々、および判決から処刑の場面までが点描されてゆく。とりわけ、絞首台の下で彼が語った「最後の言葉の奇怪なまでの馬鹿馬鹿しさ」(EJ:252/349)——すなわち、弔辞の際に用いられる紋切り型の文句をそのまま口にしたこと——は、報告のクライマックスとしてまさにふさわしい。最後のエピローグでは、アイヒマン裁判についての総括がなされ、その「失敗」(EJ:274/378)が明言されるとともに、アーレントが考える被告人が死刑とならざるをえない理由が記される。

3 「悪の凡庸さ」という語

『エルサレムのアイヒマン』へと投げかけられたさまざまな非難や批判のうち、最も有名なものとして知られるのは、ゲルショム・ショーレムによるものであろう。アーレントは返信において反論を記してゆくが、「最後の最後に、あなたが私を誤解なさらなかった唯一の問題」として、また「あなたが気づいてくださってうれしく思った」点として、「悪の凡庸さ」を挙げ、短く応答している²³。

ショーレムはこう述べていた。「あなたの本を読んでも、悪の凡庸さについて私は決して納得していません——副題に信頼を置くなら、悪について詳しく論じることが肝心だったはずですが。あなたが全体主義についての本のなかで、まったく反対の方向で遙かに説得力のある仕方提示していたとしても印象的な分析の結果と比べると、あの凡庸さなるものはむしろ一つの決まり文句のように聞こえます」²⁴。

本稿の冒頭でも記したように、副題を「悪の凡庸さについての報告」としているにもかかわらず、この語は、最終章の最後の一文に現われるのみである(つまり、英語版では *banality of evil* という語句で本文が幕を下ろす)。アーレントが「追記」において、「私は本書の副題について、それこそ本物の論争が起こってもよかったと思う」(EJ:287/394)と記していることから、先の「うれしく思った」は、偽らざる本音であろう。彼女は年長の友人へこう書いている。「もはや根源悪については語っていないということについて、あなたはまったく正しいです。〔中略〕私はいまでは、悪は常にただ極端であることはあっても決して根源的なものではなく、深みを持たず、また魔力も有していない、と考えています。それはまさに、菌のように表面に生え広がるからこそ、全世界を荒廃させ得るのです」²⁵。

『全体主義の起源』を脱稿後、アーレントがたびたび「根源的な悪」について思索を巡らせていたことは、2002年の『思索日記』の刊行後明らかとなったが²⁶、これはショーレムの目に入ることはなかったはずなのでここでは措いておこう。彼女は『全体主義の起源』の初版では最終章にあたる「権力を握った全体主義」の最終節「全体的支配」²⁷においてこう述べていた。

すべてが可能であることを証明しようとするその努力の中で全体主義体制は、人間が罰することも赦すこともできない犯罪が存在するという事実をそれとは知らずに暴き出した。不可能なことが可能にされたとき、それは罰することも赦すこともできない根源的な悪

absolute evil となった。この悪は、利己主義や貪欲や利欲や怨恨や権力欲や怯懦のような悪い動機をもってしてはもはや理解することも説明することもできまい。それゆえまた怒りをもってこれに報復することも、愛によってこれを忍ぶことも、友情によってこれを救すことも、法律をもってこれを処罰することもできまい。²⁸

確かに「印象的な分析」であると言える。少なくともショーレムには「説得力」があると映ったようだ。であるからこそ、彼は手紙において、「あなたの当時の分析がその雄弁な証明と知見を示していたあの根源悪の痕跡は、いまでは一つの決まり文句のもとで消え失せてしまっています」²⁹と書かざるをえなかったのである。

アーレントが〈悪〉を根源的な面からだけでなく凡庸な側面からも理解するようになった背景には、旧師ヤスパースによる書簡（1946年10月19日付）での忠告³⁰や夫ハインリッヒ・ブリュッヒャーによる悪の「表層的な現象」にかんする思索が影響を与えていたことだろう³¹。とはいえ、『エルサレムのアイヒマン』には、この新たな理解の符牒とも言える語が存在するのではないか。これが本稿の問い、もしくは仮説である。

4 ヒルバークとの因縁？

ところで、30年以上のときを経て、アーレントに非難の言葉を投げかけた人物がいる。歴史学者のラウル・ヒルバークである。彼は1996年刊行の自伝的な回想録『記憶の政治学』のなかで、「私の人生を面倒にしてくれた」³²人物の一人として、アーレントの名を挙げている。

ヒルバークの言い分はこうである。『ニューヨーカー』に掲載された「エルサレムのアイヒマン」の連載2回目（単行本では第5章）において、アーレントは「ラウル・ヒルバークがその著『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』の中で、この信じられないほど入り組んだ破壊機構をはじめ明確に描き出すことに成功している」(EJ:71/99)と書くなど、事実の記述において彼の著書に依拠していたことは明白だった。結果、何人かの批評家らは、（アーレントの報告とヒルバークの大作とは著しい違いがあるにもかかわらず）「列挙事実の類似を乗り越えて、彼女の意見を私自身のものと同一視した」³³。そのため、アーレントへの怒りが自分にも降りかかることとなり、彼女の代役として依頼が回ってきたあるシンポジウムでは野次や罵りを受けるほどだった³⁴。

とはいえ、ヒルバークのアーレントへの憤怒の原因にはさらに根深いものがある。彼は1959年に自身の原稿『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』の出版依頼をプリンストン大学出版局へ行なったもののそれは不首尾に終わったのであるが、その際に出版局が原稿の評価依頼を出していたのが、アーレントだったというのだ³⁵。つまり、彼女はヒルバークの原稿に否定的な評価を下しながらも、『エルサレムのアイヒマン』の執筆にあたっては本文での言及以上に、彼の原稿を利用していたということになる³⁶。アメリカ議会図書館のハンナ・アーレント・ペーパーズに所蔵されている彼女宛の（評価依頼の）手紙を根拠に記されていることから、これは真実と見るべきだろう。

5 「忘却の穴」をめぐって

ヒルバークの非難に先立つこと2年、この国のある少壮の哲学者が、『エルサレムのアイヒ

マン』におけるアーレントの「後退」を指摘していた。「記憶されぬもの 語りえぬもの」と題する論考で、高橋哲哉が引く同書の一節をまずは引用しておこう。

全体主義的支配が、善悪を問わず人間の一切の行為がその中に消滅してしまうような忘却の穴 holes of oblivion を設けようとしたことは事実である。しかし殺戮のすべての痕跡を除去しようとする——焼却炉で、また露天掘りの溝で屍体を燃やすことで、あるいはまた爆薬や火炎放射器や骨を粉碎する機械の使用によって——ナチの1942年6月以後の熱に浮かされたような試みが失敗を運命づけられていたのと同じく、反対者たちを〈沈黙せる匿名性のうちに消滅させ〉ようとするすべての努力も空しかったのである。忘却の穴などというものは存在しない。人間のすることはすべてそれほど完璧ではないのだ。何のことはない、世界には人間が多すぎて忘却などというものはあり得ないのである。かならず誰か一人が生き残ってその物語を語るだろう。(EJ:232f./321)³⁷

高橋は問う。「『全体主義の起原』ではあれほど強く「忘却の穴」の「恐ろしさ」を強調していたアーレントが、「どうして「忘却の穴」の存在と「完全な忘却」の可能性をこうも易々と否定することができるのか」³⁸、と。じっさい、アーレントは『エルサレムのアイヒマン』執筆の十数年前にこう書いていた。「〔秘密〕警察の管轄下の牢獄や収容所は単に不法と犯罪の行なわれる場所ではなかった。それらは、誰もがいつなんどき落ちこむかもしれず、落ちこんだらかつてこの世に存在したことがなかったかのように消滅してしまう忘却の穴に仕立てられていたのである」(OT:569/234)。ひとたびその穴に落ちこむや、犠牲者は屍体はおろかその生の痕跡すら後に残すことができず、生者の記憶の中から抹消されてしまう。したがって、「そうした〔「忘却の穴」に呑み込まれた〕人々の生死については、家族、友人、知人によるどんなささやかな追憶も、どんな〈小さな物語〉を物語ることももはや不可能であり、どんな歴史＝物語(histoire)もこの「忘却の穴」の奥底を叙述することはできないのだ」³⁹。

それゆえ、「このような事態に直面しつつアーレントの思考がどこへ向かったか」というと、「とりわけ『人間の条件』を頂点に展開した〈政治的なもの〉をめぐる思考のなかで、彼女がまるで「忘却の穴」への人間の消失に対抗するかのよう、公的空間の本質を〈人間の人間に対する現われ(appearance)の空間〉と定義し、この〈現われ〉を記憶にとどめるべき「物語」(story)の重要性と、「一種の組織された記憶」としてのギリシャ・ポリスの範例性を強調した」⁴⁰のである——こう高橋は説く。

このような高橋の解釈からすれば、『エルサレムのアイヒマン』での「完全な忘却などというものはありえない」というアーレントの発言は、『全体主義の起原』の認識からの明らかな後退だと言わざるをえない⁴¹との指摘も頷けないではない。けれども、私たちはここで問わねばならないはずだ。なぜ、アーレントは「忘却の穴」の存在を結局は否定した⁴²のか、と。

6 悪と忘却の穴

『全体主義の起原』の本文において「忘却の穴」という語は、二度出てくる。先ほど引いた箇所と高橋が1994年に参照していた旧版の訳書では「永遠に開かぬ地下牢」⁴³と訳されていた語である。私たちが先に第3節で引用した一節には、つぎの文言がつづいていたのだ。

屍体製造工場に、あるいは忘却の穴に投げこまれた犠牲者たちが、刑吏たちの目にはもはや〈人間的〉と見えなかったのとまったく同様に、この最も新しい種類の犯罪者はわれわれ一人一人が人間の罪業の意識で連帯することを覚悟しなければならぬ枠をすら超えている。(OT:602/279)

つまり、「根源的な悪」について言及したその直後にアーレントは、「忘却の穴」という語を再び用いているわけである。「罰することも赦すこともでき」ず、「理解することも説明することもでき」ないと形容される〈悪〉を、彼女は absolute evil と記していたが、この〈悪〉と対比されるものとしては、「限定的な悪 a limited evil」という語がつぎのような文脈で使われていた。「殺人はしかし、今日われわれが知っているように、いまだなお限定的な悪ではない」(OT:579/249)。興味深いのは、当時の彼女が absolute evil と radical evil とを等置している点である(じっさい、彼女はこれ以外の箇所では radical evil という語を用いている(OT:581,602/251,279))⁴⁴。「根源的」かつ「絶対的」な悪という語が記されている節が(英語版でも第二版以降は)「強制収容所」と題されていることから、この〈悪〉が強制収容所を名指すものとして使われていることは明白である。

ということは、『エルサレムのアイヒマン』でアーレントが再び「忘却の穴」に触れていたのは、彼女の〈悪〉の新たな理解を示唆する意図があったのではないか。すなわち、根源的かつ絶対的な悪の比喩として「誰もがいつなんどき落ちこむかもしれず、落ちこんだらかつてこの世に存在したことがなかったかのように消滅してしまう」(OT:569/234)と表現されていた『全体主義の起源』での「忘却の穴」は、『エルサレムのアイヒマン』においては、凡庸な悪の比喩として再び用いられることで、「何のことはない、世界には人間が多すぎて忘却などというものはあり得ないのである」(EJ:233/321)として、その性格があらためられることとなったのである。アーレントは「後退」したわけではない。考えを「更新」したのだ⁴⁵。「全体主義的支配が、善悪を問わず人間の一切の行為がその中に消滅してしまうような忘却の穴を設けようとしたことは事実である」(EJ:232/321)。しかし、グリェンシュパンの証言やコヴネルが語るシュミット曹長の物語に耳を傾ければ、「すべての痕跡を除去しようとする」ナチスの「試みが失敗を運命づけられていた」ことがわかるのではないか。なぜなら、「忘却の穴などというものは存在しない」からだ。「かならず誰か一人が生き残ってその物語を語るだろう」からである(EJ:232f./321)。

*

2020年8月の「NHKスペシャル」において、「アウシュビッツ 死者たちの告白」という番組が放送された。ユダヤ人でありながら「ゾンダーコマンド」として、ナチスによるユダヤ人の大量虐殺に加担させられた3人の男たち——レイブ・ラングフス、マルセル・ナジャリ、ザルマン・レヴェンタル——が収容所内のガス室周辺の複数の地中に(瓶や箱に入れて)埋めておいた大量のメモやノート類を最新のデジタル技術を用いて解読し、その苦悩や心情、あるいはゾンダーコマンドの任務の実態を明らかにする内容であった。また番組の冒頭では、犠牲者の遺品や資料の修復にあたる技師らの姿も映し出されていた。「忘却の穴などというものは存在しない」——アーレントが記していたこの一文を真実たらしめるか否かは、現在を生きる私たちの、そしてこれからこの世界に生まれ来る新参者らの、忘却への抵抗に懸かっているのである。

付記：本稿は JSPS 科研費 JP21K00100 による研究成果の一部である。

註

- 1 アーレント自身、「全部で 121 回の公判のうち 23 回は完全に〈背景〉のために充てられた。つまりこの 23 回の公判は一見公訴事実と関連がなかったように見えるということだ」と記している。Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, Penguin Classics, 2006, p.207. (ハンナ・アーレント『新版 エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房、2017 年、286-287 ページ。) 以下、同書からの引用に際しては、EJ の略号とともにページ数を原著 / 訳書の順に併記する。
- 2 代表的な箇所を挙げた (strangely, curiously を含む)。実際には 20 箇所以上でこれらの語は用いられている。
- 3 Hannah Arendt, *Responsibility and Judgment*, edited by Jerome Kohn, Schocken Books, 2003, p.159. (ハンナ・アーレント『責任と判断』中山元訳、ちくま学芸文庫、2016 年、295-296 ページ。)
- 4 アーレントは第 8 章で、判事たちは「被告を理解するために非常な努力をし、思いやりと、おそらく彼がそれまでの生涯において一度も経験しなかったような正真正銘の感嘆すべき温情とをもって彼を遇したのである」(EJ:146/204) と記す。しかしながら「彼ららついにアイヒマンを理解し得なかった」(EJ:146/205) とも。
- 5 芝健介『ホロコस्त——ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』中公新書、2008 年、iv ページ。
- 6 もっとも、第 2 節の 1 でも見るように、アイヒマン裁判をホロコस्तの罪全体を告発する場として仕立て上げようとしたのは、イスラエルの首相ベン＝グリオン、および検事長ギデオン・ハウスナーである。
- 7 Carol Brightman(ed.), *Between Friends: The Correspondence of Hannah Arendt and Mary McCarthy 1945-1975*, Harcourt Brace, 1995, p.81f. (キャロル・ブライトマン編『アーレント＝マッカーシー往復書簡 知的生活のスカウトたち』佐藤佐智子訳、法政大学出版局、1999 年、175 ページ。)
- 8 *Ibid.*, p.91f. (邦訳、203 ページ。)
- 9 ハンナ・アーレント「テレージエンシュタットのほんとうの理由」、J・コーン／R・H・フェルドマン編『反ユダヤ主義 ユダヤ論集 1』山田正行・大島かおり・佐藤紀子・矢野久美子訳、みすず書房、2013 年、278-281 ページ。なお、映画『シヨア』の監督として知られるクロード・ランズマンは、生前最後の作品『不正義の果て』(2013 年)において、テレージエンシュタット強制収容所のユダヤ人評議会最後の長老ベンヤミン・ムルメルシュタインに長大なインタビューを行ない(このインタビューそのものは 1975 年に行なわれたという)、証言として記録している。1938 年からアイヒマンと 7 年間にわたり連絡を取り合ったという彼は、アイヒマンを「悪魔」だと言い、アーレントによるアイヒマン評を言下に否定する。とはいえ、ムルメルシュタインが関わっていた時期のアイヒマンがニスコ計画やマガダスカル計画に奔走していた頃の人物で、アーレントが見ていたアイヒマンが(それから 15 年以上あとの)法廷で被告人席にいた人物であることを思えば、両者の見解の相違はそれほど問題なわけではない。なお、アーレントは「組織能力と交渉能力」にかんしてアイヒマンは「他の人々より優れていた」と記している (EJ:45/62)。
- 10 ベッティーナ・シュタングネット『エルサレム〈以前〉のアイヒマン 大量殺戮者の平穏な生活』香月恵里訳、みすず書房、2021 年、63-64 ページ。
- 11 同書、57 ページ。
- 12 同書、95 ページ。
- 13 同書、100 ページ。
- 14 同書、143 ページ。
- 15 同書、58 ページ。
- 16 エリザベス・ヤング＝ブルーエル『ハンナ・アーレント 〈世界への愛〉の物語』大島かおり・矢野久美子・梶田文・橋爪大輝共訳、みすず書房、2021 年、500-501 ページ。
- 17 Carol Brightman (ed.), *op.cit.*, p.142. (邦訳、272 ページ。)
- 18 1964 年刊行のドイツ語版『エルサレムのアイヒマン』では、「まえがき」として、本文の前に配置されている。

- 19 とはいえ、追記において記された以下の文章は、『エルサレムのアイヒマン』を再読するうえで、いわば指針となりうるものである。「この本はユダヤ民族を襲った最大の破局の歴史を扱うものでもなければ、全体主義についての報告もしくは第三帝国時代におけるドイツ民族の歴史でもなく、まして悪というものの性質に関する理論的論文でもない。すべての裁判の焦点は被告という人間、彼個人の歴史を持ち、さまざまな性質、特殊性、行動パターン、環境の、その人間にだけしか見られない配合を持った生身の人間なのである」(EJ:285/392)。
- 20 『ニューヨーカー』掲載時の「エルサレムのアイヒマン」は、オンラインで当時の記事を読むことができる(ただし、2回目以降の記事の閲覧は有料)。初回の本文のURLは以下。<https://www.newyorker.com/magazine/1963/02/16/eichmann-in-jerusalem-i> (2021年11月15日最終アクセス)。なお、連載時には副題および章タイトルは設けられていない。
- 21 ヤング＝ブルーエル、前掲書、506ページ。
- 22 アーレントによれば、「初版では事のついでに触れたにすぎなかった」(EJ:xxiv/ii)が、改訂時に記述を追加したとのことである。
- 23 マリー・ルイーゼ・クノット編、ダーヴィト・エレディア編集協力『アーレント＝ショーレム往復書簡』細見和之・大形綾・関口彩乃・橋本紘樹訳、岩波書店、2019年、381-382ページ。
- 24 同書、372-373ページ。
- 25 同書、382ページ。
- 26 たとえば彼女は1950年6月、8月、1951年7月、1952年1月、1953年4月に「根源的な悪 radikal Böse」にかんする文章を書きつけている。ハンナ・アーレント(ウルズラ・ルッツ／インゲボルク・ノルトマン編)『思索日記 I 1950-1953』青木隆嘉訳、法政大学出版局、2006年、9、25、152、433ページ。また1951年3月4日付のヤスパース宛の手紙では、こう記している。「悪はこれまで予想されていたよりももっと根源的だということのみずから立証しました。〔中略〕西洋の伝統は、人間がなしうる最大の悪も利己心という悪徳から生まれると見る先入観にとらわれています。でもその一方で私たちは、最大の悪もしくは根源的な悪はそういう人間的に理解可能な罪ぶかい動機とは、もはやまるっきり関係がないということを知っています。根源的な悪とはほんとうはなんなのか、私にはわかりませんが、それがつぎのような現象とどこかでつながっているような気はします。つまり、人間を人間としては不要にしてしまうという現象」(L. ケーラー／H. ザーナー編『アーレント＝ヤスパース往復書簡 1926-1969 1』大島かおり訳、みすず書房、2004年、192ページ)。
- 27 1955年に刊行されたドイツ語版の『全体的支配の要素と起原』では、最終章が「全体的支配」と題され、最終節は「強制収容所」と題されている。
- 28 Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, Penguin Classics, 2017, p.601f. (ハンナ・アーレント『新版全体主義の起原 3 全体主義』大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、2017年、279ページ。)以下、同書からの引用に際しては、OTの略号とともにページ数を原著／訳書の順に併記する。なお、原語を付しておいたが、「根源的な悪」は「絶対的な悪」と訳したほうがよいと思われる(ちなみに旧版の訳書では「絶対の悪」と訳されている)。というのも、この引用の直後に 'radical evil' という語があるからだ。これについては第6節であらためて述べる。
- 29 『アーレント＝ショーレム往復書簡』373ページ。
- 30 これについては、拙著『活動の奇跡——アーレント政治理論と哲学カフェ』(法政大学出版局、2020年)の221ページ(註11)を参照願いたい。
- 31 ヤング＝ブルーエル、前掲書、492ページ。なお、ヤスパースは1963年12月13日付のアーレント宛の手紙で、「コプラーの話では、「悪の凡庸さ」という言い方を思いついたのはハインリッヒで、いまになって自分を責めているそうですね。その尻ぬぐいをきみがさせられている、と。この報告はひょっとしたら間違っているか、あるいは私の記憶違いかもしれませんが。この思いつきはすばらしいし、この本の副題としてぴったりだと思いますよ。つまり、この悪が凡庸なのであって、悪そのものが凡庸なのではないということです」と記している。L. ケーラー／H. ザーナー編『アーレント＝ヤスパース往復書簡 1926-1969 3』大島かおり訳、

- みすず書房, 2004年, 90ページ。なお, 訳語の「陳腐」を「凡庸」へと変更している。
- 32 ラウル・ヒルバーク『記憶——ホロコーストの真実を求めて』徳留絹枝訳, 柏書房, 1998年, 165ページ。なお, ヒルバークとアーレントとの因縁めいた関係については, 田野大輔氏(甲南大学)から教示を受けた。記して感謝する。
- 33 同書, 174ページ。
- 34 同書, 178-181ページ。ヤング=ブルーエルもこのシンボの様子を伝えている。『ハンナ・アーレント』534-535ページ。
- 35 ヒルバーク, 前掲書, 184ページ。
- 36 『エルサレムのアイヒマン』と『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』の目次を見比べてみると, 確かに前者の第4章から第6章までが後者の第6章と第9章に, また前者の第9章から第12章までが後者の第8章に実によく似ている(いわば, 後者が前者の背骨のような役割を果たしている)との印象を受ける。なお, アーレントは連載記事の初回と第3回, 第4回でヒルバークの文章を引用する際に, 著者名を記していないのだが(いずれも現行の単行本では明記), 第2回では, 本節での引用が示すように, 彼の名とその書名とを明記している。また, 1965年の増補改訂版の「追記」で, 彼女は「私はジェラルド・ライトリンガーの『最終的解決』を利用したし, それ以上にラウル・ヒルバークの『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』を参考にした。この本は裁判の後で刊行されたが, 第三帝国のユダヤ人政策についての最も包括的な, 最も資料の豊富な報告である」(EJ:282/388)とも述べている。ただし, これはヒルバークが回想録で述べていることだが, 1964年4月20日付のヤスパース宛の手紙で, 彼女は「彼はかなり頭がどうかしていて, いまはユダヤ人の「死への願望」とやらについて蝶々しています。彼の本はほんとうにすぐれています, ただそれは事実の報告に徹しているからこそです。もっと一般的な, 歴史を扱っている序論的な章は, まるでブタ小屋」と, かなり辛辣な言葉を記している。『アーレント=ヤスパース往復書簡1926-1969 3』100ページ。
- 37 高橋の引用では, 後半の「忘却の穴などというものは存在しない」以下が傍点で強調されている。高橋哲哉『記憶のエチカ——戦争・哲学・アウシュヴィッツ』岩波人文書セレクション, 2012年, 13ページ。なお, 本引用での「忘却などというものはあり得ない」は, 高橋が参照していた旧版の訳書『エルサレムのアイヒマン』では, 「完全な忘却などというものはあり得ない」と訳されている。
- 38 同書, 14ページ。
- 39 同書, 12ページ。
- 40 同前。
- 41 同書, 17ページ。
- 42 同書, 32ページ。
- 43 ハナ・アーレント『全体主義の起原 3 全体主義』大久保和郎・大島かおり訳, みすず書房, 1981年, 266ページ。本訳書はドイツ語版を底本とし, 英語版をも参照しながら, ドイツ語版にない叙述を〔 〕内で可能な限り補足するという方法をとっている(「訳者あとがき」325ページ)。「永遠に開かぬ地下牢」は, その〔 〕に現われる語句である。とはいえ, 本文でこのあとに引用する一節の英語の原文はつぎの通りであり, この語句に該当する語は見当たらない。‘Just as the victims in the death factories or the holes of oblivion are no longer ‘human’ in the eyes of their executioners, so this newest species of criminals is beyond the pale even of solidarity in human sinfulness.’ (OT:602) なお, 英語版では次段落でも holes of oblivion という語が記されているが, これはドイツ語版ではべつ表現(新版の訳書だと「人間を余計なものにするために全体主義の発明したさまざまな制度」(OT:602/280))へと言い換えられている。
- 44 『思索日記 I 1950-1953』の註記によれば, 『全体主義の起原』の初版(1951年)でアーレントは absolute evil という語を使っていたが, ドイツ語版のために書き直し, 初版の「結語」を「イデオロギーとテロル」へと入れ替えたあとで radical evil (あるいは radikal Böse) という語を用いるようになったとのことである(25-26ページ)。確かに英語版で absolute evil と記されている語が, ドイツ語版では radikal Böse と表記されている。
- 45 バーンスタインは, 根源的な悪と悪の凡庸さをテーマとしたアーレント論において, 彼女の独特のスタイ

悪と忘却の穴の問題

ルとして、「思考の列 (thought-trains)」——バーンスタインはそれを「これらの思考の列は経験に基づき、思考を活性化させ、それに具体的な特性を賦与する。思考の列どうしが交錯して、混ざり合い互いを補強し、ときには対立しあう」と説明する——を指摘したうえで、悪の凡庸さの発見によって、「彼女は独自の根源悪の理解に到達した思考の列を決して撤回していない」と述べている。その意味では、悪を根源的なものとしてだけでなく、凡庸なものとしても理解する新たなまなざしが加わったと言うほうが適切なものかもしれない。とはいえ、本稿の着眼は、悪の新たな理解の仕方に応じて「忘却の穴」の描き方が変わったのではないかというものなので、バーンスタインの解釈ととくに矛盾はしない。リチャード・J. バーンスタイン『根源悪の系譜——カントからアーレントまで』菅原潤ほか訳、法政大学出版局、2013年、326ページおよび344-345ページ。

なお、文脈の都合上、第5節の本文では述べるができなかったが、『全体主義の起源』において「忘却の穴」が言及される際、それがナチスの強制収容所だけでなくソ連の秘密警察（の管轄下の牢獄や収容所）をも念頭に置かれていた点に注意を向けてみるのもいい。すなわち、（高橋の言い回しを借りるなら）『全体主義の起源』執筆時のアーレントおよび高橋は、「忘却の穴」の脅威（原理的可能性）をあまりに過大評価しすぎているのである（そのためこの悪は、「根源的」かつ「絶対的」なものだとされたのであろう）。高橋、前掲書、13ページ参照。